

「マイペンライ」は、タイ語で「なんでもないよ。気にしないで」の意味。アジアの人々のおおらかな心で交流が広がるようにとの願いを表現しました。

マイペンライ 通信

編集・発行 アジア保育教育交流推進実行委員会
(略称：大阪マイペンライ)

2010年3月25日

No. 77

TEL

090-3948-8372

FAX

06-6683-2529

【速報】国際ボランティア貯金寄附金

「バンコク・保育者、子ども、保護者を対象とした 保育・研修事業」が認められる

昨年9月に「郵便貯金・簡易生命保険管理機構」(以下機構)に3年目にあたるタイでの研修事業の申請を行いました。この度「機構」より通知があり、253万6千円の寄附金が交付されることが決定しました。

決定の内容は、タイのバンコクで実施する、①「出前：ともにあそぶ公開保育」②「親子遊び公開保育」③「公開保育実践研修会」④住民講演会⑤モニタリングの実施の5つの事業で、引き続き子ども情報研究センター、わかくさ保育園などのご協力を得て実施する予定です。今後は、交付される寄附金に基づいた実施計画書の提出を早急に行い、当面する5月の事業の具体化をめざすこととします。

2010年第18回総会を4月22日に開催します。

会員(個人、団体)の皆さんの参加をお願いします。

日時：2010年4月22日(木)午後6時30分～

場所：PLP会館5階 大会議室

議事：第1号議案 活動の経過と方針(マイペンライのこれから/サワディ基金のとりくみ/来日
招聘研修のとりくみ/スタディツアーのとりくみ/子どもスタディツアーのとりくみ/絵本
プロジェクトのとりくみ/「国際ボランティア貯金」事業の推進について/ほか)

第2号議案 2009年度決算案と2010年度予算案

第3号議案 2010年度役員体制案について

第4号議案 「国際ボランティア貯金」事業の推進にかかる特別会計の設置について

第5号議案 その他

記念講演：未定

会員(団体・個人)の皆さんへ

当会の活動は皆さんの会費で支えられています。総会までに2009年度の会費の納入をお願いします。引き続き「国際ボランティア貯金」事業への寄付もよろしくをお願いします。

宛名シールの名前の横の数字がすでに納入いただいている年度です。郵便振替や銀行振込でお振込みください。個人の方は3000円、団体は10000円の納入をお願いします。

郵便振替 口座番号 00910-4-18125

加入者名 アジアの保育教育交流推進実行委員会

銀行口座 りそな銀行 桜川支店 普通預金 口座番号 2100152

口座名義 アジア保育教育交流推進委員会

<p>目次 ■国際ボランティア貯金寄附金決定（P 1） ■第18回総会の開催について（P 1） ■会費納入・「国際ボランティア貯金」配分金事業への寄付のお願い（P 1） ■スタディツアーに10名（P 2） ■学生寮建設・保育園改修モニタリング報告（P 2～6）</p>

西タイ、カンボジアへ10名のツアー

昨年募集したスタディツアーには10名の募集があり、12月13日（日）～20日（日）の日程で実施しました。行き先は西タイとカンボジアの2コースで、それぞれ5名ずつの参加となり、全員無事帰国しました。

このツアーの中では、大阪市従業員労働組合市民生活支部が支援を進めている、ターク県ターソンヤン郡のメーソン地区にあるバーンメーラムーン小・中・高等学校を訪問し、学生寮の建設状況を視察しました。また、平行して、「国際ボランティア貯金」の寄附金で実施した「学生寮建設及び保育園改修事業」のモニタリングを実施しました。

バンコクでは、スラム地区の保育園や図書館を視察するとともに、市民生活支部の支援によるサンプル地区の建築途中のクッキングセンターについても状況の説明を受けました。詳細の報告は、後日「報告集」として配布する予定です。

<p>少数民族の初等教育整備のための学生寮建設及び保育園の改修〔タイ〕 モニタリング報告（ターク県ターソンヤン郡）</p>	<p>増田和生</p>
--	-------------

2009年度ボランティア貯金配分金にかかる事業状況の現地モニタリングを、12月13日から20日まで実施した。モニタリングは、タイ・シーカアアジア財団メンバーとマイペンライ役員ほか1名で行った。ターソンヤン村小・中学校学生寮の改築、ボボキー保育園の改修、フェイマノック保育園の改修の状況を確認するとともに、寮改築では学校・寮生、寮生の家族などからの評価や感想、保育園改修では村・地区役員、保育者・保護者の思いなどを伺ってきた。関係者・当事者から、各施設が当初の目的どおり立派に出来上がり、学校関係者や地域の人々に大変感謝されているとの報告をいただいた。あわせて、国際ボランティア貯金、シーカアアジア財団、アジア保育教育交流推進実行委員会に対する感謝と、改築・建築の過程で関係者それぞれが創意工夫し、自分たちの課題を自分たち自身の力を寄せ合って前進させていこうという意欲が出てきているとの評価をいただいた。

＜ターソンヤン村 小・中学校学生寮建設の状況について＞

12月15日（火）、ターソンヤン小・中学校を訪問。前年度の支援で建設された図書室を会場にタノム副校長からターソンヤン郡での教育事情、学校の状況のお話をお聞きした。あわせて寮生との懇談を行った。学校設立は36年前の1973年。（前身の学校は他の場所で100年前から設置されていたがこちらへ移転） 教師は62人（分校のメーチャワン9人、ティーソーメー4人を含む） 生徒 全体で1300人 うち本校1071人（幼～中3） 分校はメーチャワン193人（幼～小6） ティーソーメー38人（幼～小4）

今の課題は教室の不足。この間、生徒の数が増えている中で学校として様々な所に働きかけて教室の確保に努力している。そのような中で昨年設置された学校図書館は子どものための場となっている。皆さんの支援が有難かった。この学校の校区は広く、遠くの子は小4までか、小6までの分校で学ぶか、学校などで寮生活するかでないと学べない。寮の確保も重要な課題だ。（現状は分校で小4まで学ぶがその後、交通費や学校諸経費・雑費が用意できなくて中退してしまう子が出てしまうとの話もあった）

寮は学校に102人（女子寮・校内54人、男子寮・村内48人） 児童館（他のNGOの支援）に53人、カトリック系寮に37人という状況。今回の女子寮の建設で快適な生活環境が確保できたが、男子寮はまだ従来のみで、古くて暗い。改装したいがまだ目処は立っていない。

寮生はメーニン村から17人（村まで行くには車で途中まで行き、山道を3キロ程歩く。全体で1時間

ほどかかる)、フェイマノック村から7人(6キロほど歩く)、メーツウン村(小川や峠ごえで6キロ)メーヒー村(3キロほど歩き)から5人、メーロン村からは1人(22キロ離れている)。この子は川沿いなので川舟に乗れるときもあるが、国境地帯で安全面から何時も乗れるとは限らないので、22キロ歩いて帰る時もある。

寮生は今、小3以上の子だ。以前はもっと小さい子もいたが、この何年かで分校もでき、幼稚園クラスや小学校の教室も増え、そこに小4までや6年までが通えるようになってきた。子どもたちの親は農業従事者がほとんど。寮生の食費までは困難なので学校で朝食と夕食は賄うようにしている。食材を自給自足するべく、学校で野菜などを育てているし、役所などから米の余りなど提供を求めた事もある。親はほぼ全員がカレン語以外話せない。字も殆ど書けない。子ども達は家に帰るとカレン語で話し、学校ではタイ語で学んでいる。

<女子寮の生徒・約40人との懇談>

訪問した私たちに寮生から感謝を込めて手作りのカレン布かばんが贈られ、感激。寮内にも案内を受け、明るくなった寮での生活ぶりを見学。参加者が寮生から「カレン布織り」の手ほどきを受けていたが、難しそうでてこずっていた。国際ボランティア貯金の配分金を明記した名板も入り口に取り付ける。新築の寮は2階建て。2階は上級生、1階は下級生。高めの天井、窓も少し大きめに工夫し、鉄製の2段ベットを入れ、入り口近くをフリースペースとしている。2階の明るさに比べて1階は光が弱く、蛍光灯での工夫も必要ではないかと感じた。

女子寮の生徒と懇談した。小5以上はリボン着用。スカートの色も少し違う。でも細かくまでは規制していない。男子は半ズボンで小学生と中学生で色を分けている。話しの中で、将来の希望は尋ねると、山の村の幼稚園の先生になりたいと返ってきた。

副校長さんの話しによると、皆に公務員になることを勧めている。そして村に帰らないと駄目だと考えていて、そんな話をよくしている。学校を出てもバンコク等へ行ってしまうという事が多いと。少しづつ地区行政役場(オーポート)の職員や、この学校でも卒業生が補助職で働くようになって来たりと、成果も出始めている。

副校長さんは「私は村の出身だが、カレンには精霊信仰がある。カレンの文化には、「パガニョン」(ありのまま)(シンプルに生きる)オニョニョ(簡単に食べ)オーニョーエョー(簡単に生活する)という考え方があり、手での食事も、寝るスペースの作り方なども今も守っている。家の霊はその様な所にしか居つかない、という考え方なのだ。子ども達にはタイ社会と村の架け橋に成って行って欲しい。それが彼女らの役割だと思っている。」と。

<メーソン地区内のメーニン村・寮生のお家を訪ね>

学校から車2台を乗り継いで30分ほどのメーニン村。スニッサーさん(中3)、スーニーさん(中2)、ルアンチャイさん(小5)、の各家を訪ね、ご家族の皆さんのお話を聞いた。各家とも高床式で柱は木材だが、壁や床材は竹で建てられている。間取りは20~30㎡ほど

<スニッサーさん宅>

家族5人、父と母、弟12才(メーサリット小4)、姉がターソンヤン村小・中学校に幼稚園から通っている。校区が違うのは何故と聞くと、近くの友達が多いので、との答えだった。

お母さんへの質問で、「もし可能なら、学校はどこまで行かせたいですか?寮の事を娘さんはどの様に言っていますか?娘さんの成績をどう思っていますか?どの科目が好きだと言いますか?」と尋ねた。お母さんは「お金さえあれば娘には大学まで、仕事だって成りたいものにさせてやりたい。寮が綺麗になった。新しいベットも来たよ、って言っていました。勉強のことは家で余り言いません。」

副校長の話では、以前はこの村は焼畑農業で、村ごと移動していた。20年ぐらい前から移動をしなくなった。お母さんはメーニン村で生まれている。家も3年ごとに住み変わるので竹でよかったのだ。精霊信仰の儀式も、家族の病気や災難などがあれば、直系の親族全員が帰ってきて、二晩一緒に過ごす。今も年に一度ぐらいはある。カレンでは教育にかかる親としての責任についてはあまり無い。子どもの学歴が高くなったら、バンコクへ行って帰ってこなくなるのが現状だ。ただ少しづつ変わってきている。今この村の村長は女性で私の教え子だ。保育園の保育士さんもいる。

<スーニーさん宅>

お父さん(45才)、お母さん、兄と姉、弟の家族。

お父さんは「勉強に関しては、出されば上の学校へ行かせたい。しかし、学費がかかることや学校を出ても仕事が無いこともあり、難しいかな。」と。また、「自分の畑は無いが、母方が田んぼを持っていて親戚が交代で米を作っている。今年は順番ではなかった。国の土地で陸稲を作った。150缶取れたら自分たちの食べる分は確保できる。もし法律に触れなければだが」とも。

副校長によるとカレン人は少数民族で唯一象を扱える民族だ。家族に一頭あれば皆の財産として交代に使うということがやられているとのこと。

寮に入っているスーニーによると、兄は17才でバンコクへ働きに行っていたが、今は帰っていて無職だ。姉は18才で高校へ行っている。妹は小学校6年で寮生の中にいる。スーニーさんは「学校の先生になりたい。アイドルはパンケーキ（若手人気女性アイドル）が好き。」町への憧れってある？という質問に対して、「バンコクなんかに行ってみたいとは思わないです。家族といたほうがいい。」

<ルアンチャイさん宅>

お父さん(40才)、お母さん(31才)、タナウト(10才 小3)、ナリー(8才 小1)、ヨッサバック(11ヶ月)の家族。

お父さんから「家の前の畑が親戚のもので、今年は順番で米を作った。今年は良かったが、来年は無いので不安定だ。家を建てるのに政府に2万バーツを借りた。返すためにバンコクへ出稼ぎに行かねばと思っている。(タクシン首相時代にも2万バーツ貸付制度があり、10年ほど前に利用して今の家の基礎部分を作った)」とお話し。娘さんの将来の仕事についてお母さんは「先生に成りたいと言っている。出来たらいいけど。自分はメーサリットで小学1年までしか行ってない。勉強を続けるのは難しいことがある。お金の問題も。」と。学生寮については「娘から最近になって新しくなったと言う事は聞いている。日本の人が新しい寮を作ってくれた。」と。ルアンチャイさんに対して、「日本のことで知っていることはありますか？」との質問に「ドラえもんとかは日本でしょ。科学マンガなんかが好きです。」

副校長からは「この家族は子どもら皆を学校へ行かせているだけ良いですね。」

<改修したボボキー保育園訪問>

車でメーラムーン小・中・高等学校から約30分、午後1時に到着。山の中腹にある保育園、村の小学校から30メートル程下の平地に建っている。当日は小学校の幼児クラスが休みで子どもたちの数は多め。改修前の保育園は、半分が土間、半分の床は竹材で作られていた。改修は風の通りを工夫しながら壁を木で囲い(一部未完成)、屋根にはトタンを張り、床をタイル張りして清潔に作られていた。保育園の先生はスパポンさん。ふもとの村の出身で、保育士2年目になる。先生用の部屋(寮)が無いので今は村内に下宿。(保育園の一角を寮として使用できるよう工事中)今は20人が在籍、0才~2才。時には親と畑に行ったり、下の子を連れてくるなど、数は上下するという。この村も親の仕事は農業。食用にする米作りと、売却用のトウモロコシ。多くが畑まで1時間以上歩くという。



メーラムーン小・中・高等学校の分校になるボボキー小学校は幼児クラスと小1~3年までの1クラス。2人の先生が教えている。給食も保護者の協力を得ながら2人の先生が交代で作っている。村民は200世帯、700人程。4つの集落がある。本校まで通っている子どもは約2時間かかるという。

シーカアアジア財団の移動図書館活動で人形劇も予定されていて、保護者や村人も来園し、公演の後、村人との懇談の場が持たれた。

お母さんらは子どもたちに、学校はどこまで行かせようと思っていますか？との質問に、お母さんからは、「出来るだけ行かせたい。学年が進む中で、学費を負担できなくなるのが心配だが。」学校の先生などに成って、戻ってきて欲しいと思いますか？との質問には「そうなったら嬉しいけど…。自分たちは勉強してこなかった。子どもらには勉強して欲しい。今メータンでは夜間の識字学級の場がある。」と。

<改修したフェイマノック保育園訪問>

12月17日は改修に向けて村の人々との調整を経て、積極的な建築への参画を得られたフェイマノック保育園を訪ねた。チャンチャイ村長、リヘー副村長、サマンチット・オーポートメンバー、をはじめ、ノーポー(給食担当)、ジョーユー(保健衛生担当)パッチー(助産師)さんら男性陣と子どもらのお母さん、おばあさんら総勢40人ほど。村人との仲介の労を取って頂いたタノム副校長も参加。当然、保育園の必要性を訴え、ニーズ調査を経て設置を実現し、着任したオラワン先生も参加。

子どもは3才から6才で30人が通っている。村には三つの集落があり、ここフェイマノックもその一つ。他の二つは歩いて30分程のところそれぞれある。183戸で830人。もともと村の集

会場的な場所を利用し、1年前に開所した。床は土間、わずかな竹材で仕切られただけの壁の為、雨や風にさらされ、保育環境としては厳しいものだった。今回の改修は図面もタノムさんが指導し、元の場所から10メートルほど離れた場所を切り拓き、40㎡（5×8）で床をコンクリート、柱と壁をしっかりと木材で作し、屋根はトタンを張っている。園の前庭もコンクリートで広場とし、多目的にも利用可能となっていた。村人のウイナイさんが責任者となり、村人自身がコンクリートを張り、柱を組んで建設を行った。10万バーツの予算、人件費はゼロ、ふもとからの資材調達に経費がかかり、（当初約束されていた役場の資材運搬での協力は最初の1回だけに終わった）とりあえず完成はしたが、床は予算が足らずコンクリートの打ちっぱなしとなっていて、この日は人の座る部分にビニールごしが敷かれていた。

親たちはカレン語、副校長とオラワンさんはタイ語を分かるが、子どもたちは家でのカレン語と保育園でのタイ語の勉強などでバイリンガルに育っていく。村の人らとの懇談はダブル通訳で、もどかしかったが、村人の自分たちの手作りの保育園が立派になったことへの喜びと、子どもたちへの期待、村の今後への想いを感じさせられた懇談だった。

フェイマノック保育園の後、子どもたちは歩いて30分位の所に、バーンメーニン分校（1年～3年）があって、そこに通うことになる。今も小学低学年は40人がそこへ通っている。4年からはメーサリットの本校へ行くことになるが、その時に10人位は続けられない状況だ。寮費がいたり交通費が必要となったりで、現金収入が無ければ難しくなる。村人の実情としてはバンコクへ出稼ぎに行き、何とか現金収入を確保している。（長い人は1年位行っている人もいる。）



村人の男性からは、「コンクリートのままの床を何とかしてやりたいが難しい」「防寒着などもあればよいのだが。」「子どもらのおもちゃや教材や服なども欲しい。」などの声があがった。

お母さんへ、「子どもらは家で友達のことや保育園での話などをしていませんか。なにかしかりしてきたと思ったりすることがありますか。」と尋ねると、保育士のオラワンさんは「子どもらには家に帰ったら、今日は何々をしたよとか、お父さんやお母さんに話をしてねと言っています。」と。

お母さんからは「保育園に行くようになったのは1年ほど前からで、それまでは小学校へ行くまでは家にいた。家で面倒を見なければならなかったが、保育園ができて、いろんなところで、楽になったと思う。」との話。

< バーンメーラムーン小・中・高等学校訪問と見学 >

12月16日午前、メーソン地区にあるバーンメーラムーン小・中・高等学校を訪問。学校の現状や課題について、ソムサック校長先生より説明を受け、学校や寮などを見学した。ここは2年前より高等学校をスタートさせた意欲的な学校だ。7代目校長のソムサックさんが先頭に立ち、困難な中でも地域の教育水準を少しづつでも前進させるために努力をされている様子が伝わってくる。

学校は設立36年、現在の教員は59人、全校生徒1505人、内寮生は517人。この本校の他に分校が13校（小1～小3まで）中分校が3校（4年～6年も一緒）ある。分校を修了すると本校に通うことになる。通って来ている子どもたちは11村からで、その広さは25km²に及ぶ。ボボキ一村の小学校もこの分校だ。36年前に6人の生徒からスタート、今は山の上にまで分校が出来始めている。それを受け入れる定員の確保に努力していると語られた。

ソムサック校長は、「この学校は寮生が多い。遠くから通ってきている子もいるし、遠く過ぎて通えない子が寮を頼りに学校に来ようとしている。親も現金収入に乏しく、近くなら分校までは行かせるが、その後が難しくなる家庭もある。それでも寮があれば、勉強を続けられる子が出てくる」と述べ、大阪市従市民生活支部からの寮改築の支援に対して、「皆さんからのご支援、ご理解にお礼を申し上げます」と挨拶された。

寮の建築でシーカアジア財団との調整役のウタイワン先生（タイ語・5年生担当）と2人で学校内の教室、食堂、他の寮、建設中の洗濯物干し場、生活物品を扱う生協、社会科教材のカレンの家、足ふみ脱穀機などを案内いただいた。王室プロジェクト（プラテープ王女）のNGOが作った寮も一棟あり、12月29日に学校来訪ということで、ちょうど全校をあげて準備をしている最中であったが、

時間を割いていただいた。校舎や寮の建物は山を切り開いて作られていて、大きな傾斜地全体が学校となっている。大きな運動場は無さそうだった。ちょうど夕食前後の時間帯で、生徒がセパタクロウやグランドサッカーなどを楽しんでいた。

市民生活支部支援の寮は、基礎工事の真っ最中で、旧の寮は既に解体され、建物の基礎部分や柱などの鉄骨組みとコンクリート作業が行われていた。支部からの提案を受けて、天井を高くし窓を大きく取り、開放感を持たせた寮建設が計画されている。

校長から「高校は昨年からで今1年と2年生のみだが、農業系の勉強をし、普通科の資格も取れるようにやっている。2年後には看護系、介護系の高校教育もやろうとしている。大学に進むのは難しいが、残って仕事に就けるような能力を付けさせて行きたいのだ」と思いが語られた。

<改築中の寮へ入寮予定の生徒たちとの懇談>

夕方5時過ぎから寮生たち（女子5人、男子6人、高校生と中学生）との懇談を学校の教室を借りて行えた。夕食の準備とグループでの夕食中と重なったが、ぎりぎりまで率直な話が聞けた。

寮生からは「学生寮では、寮生は年齢の縦割りでグループを作っている。」「改築で古い寮がないので、今は残りの二つの寮に分かれて入っている。新築の寮が出来れば入ることになると思う。」「寮が出来れば二階建てで、明かりがしっかり取れるのがいいと思う。」「洗濯した服が干せる場所、たんすや物を整理するためにベッドの下に引き出しが付いていればいい」「電気が少なくて部屋内が暗い」「消灯が10時30分なので、それからは勉強が出来ない」「スポーツは夕方の1時間でします。」「昼休みは30分のみ」「もっと勉強したいので私はスポーツはしません。」など意見が出された。

<スワンプルー保育園・図書館見学交流>

スワンプルー地区も約40年前に東北タイからの出稼ぎ労働者・農民が住み始め、多いときは28年前ごろの1700世帯、5~6000人と言われている。何度か火事が起きているが、ほぼ地域全体を焼き尽くしたのが5年前の火事であった。幸い死亡者は無かったが、焼け出された人々が立ち上がり、行政交渉を行った。その過程で、住民の中で公営住宅で良しとする人々と、自分たちで住宅の再建を目指す人々と二分する事態となった。その結果、5年たった今セルフヘルプ住宅は264戸が建設され、保育所・図書館も再建されたが、一方、公営住宅は500戸が建設されているが、火事で焼け出された人の居住率は50%に届かないといわれている。多くがすでに入居時までには権利を売却してしまっている状況となっている。

保育園の1階でお話を伺い、昼食を保育園の園児たちと一緒に頂き、地区内を案内いただいた。大阪市従市民生活支部が支援しているクッキングセンターも建築途中の状況の説明を受け、調理台の高さなど意見交換を行った。説明・案内をいただいたのは、保育園副園長のノンヤオさん。長くスワンプルー地域で活動されてきた経験から、参加者からの質問に地域の事情を含めて具体的に答えていただき、理解を深めることが出来た。

「火事の災害から後の再建時に、住宅を中心にどのような問題が生じたか？大きかったのはどのようなことで、どう解決して行ったのでしょうか？」との質問に、「この地から立ち退きを強制されず、住宅を再建したいと希望。行政の中にスラム開発担当の「コミュニティ組織開発機構」があり、ここでのやり取りで、自分たちで貯蓄組合を作り、3年間ほど貯蓄を続け、それを元手に政府から借りて、15年計画で政府へ返済をしている。スラム地区は平屋のコミュニティ、そこへ高層住宅となればコミュニティが壊れてしまう。公営の高層住宅でなく、貯蓄組合方式を選択した。高層住宅へ入る人は何も考えることが無く、政府が決めたまま入るだけ。セルフヘルプ住宅は全て、部屋の造りや公共のスペースなどを自分らで決めていく中で進めた。」

「貯蓄の出来ない層が排除されるということは無かったのですか？」との質問に、「最初はお金のある人が多く出し、少しの人は配慮された。今の時点では返せない人も出てきて、コミュニティの大きな問題となっている。貯蓄組合は利子で払えない人の返済分を出したりしているが追いつかない状況もある。」

「生活改善運動が必要となってきているように思う。どのように進めているのですか？」との質問に「いかに最初の意識を持続させるか。月に一度やっているが・・・住民委員会としては。地域の文化行事を夫々の人が役を持ってかかれるように工夫するとか。そういう風な考え方が出来るようになったのは、外部のSVAやシーカーの働きかけが大きかった。タイの中でスラムの問題をどのようにするか、ここがモデルになることを目指している。」「障害者を受け入れる保育所は少ないんでしょうか。大学の研究者などに働きかける取り組みが必要になってきているのでは。」との質問に、「発達障害や癲癇の子どもがいます。他で受け入れてもらえない子どもも受け入れる努力をしていて、スラムの外からの子どものもここに通っています。」